

# 診断指標候補の物質発見

## うつ病

徳島大大学院医歯薬学研究部の大森哲郎教授と沼田周助准教授（精神医学）の研究グループは、うつ病の診断指標（マーカー）となる可能性が高い血中代謝物質を発見した。簡易な血液検査による診断の実現や病態解明、治療薬の開発につながるかと期待されている。



沼田准教授



大森教授

うつ病は日本で最も多い精神疾患で、抑うつ気分や活動性の減少が特徴。患者数は厚生労働省の推計で約70万人、生涯有病率は3〜7%とされている。症状はさまざまで医師の問診で正確な診断が難しいケースもあるた

### 徳大院グループ

## 患者と健常者 血中濃度に差

め、客観的な診断マーカーの確立が求められている。

研究グループは、うつ病患者と健常者それぞれ33人の2グループ

から血液を採取。血液系研究科分子・機能領域に含まれる代謝物質を分析、比較したところ、246物質のうち33物質の濃度に差異があることを証明した。グルタミン酸やメチオニン、スルホキシドなど五つの代謝物質は特に差が大きく、診断マーカーとして高い精度を示す可能性があることが分かった。

研究を主導した沼田准教授は「今後は他大と連携し、診断マーカーの有効性を検証したい」と話している。研究成果は英科学誌サイエンスフィックス・リポーツ電子版に掲載された。（笠井理）

### 「選別法」に可能性

愛媛大学大学院医学系研究科分子・機能領域の上野修一教授の話を簡便な採血からうつ病の診断が高い精度で行えることを証明した研究だ。実用化には詰めた。将来、うつ病スクリーニング（選別）法となる可能性を秘めている。病因を明らかにする意味でも評価できる。